

The Admirable Crichton を中心にみた J. M. Barrie の手法と Idea 瞥見

田 辺 や し ま

“A class of recent fiction, affecting to describe, with much use of the vernacular, common life in Scotland.” これは ‘Kailyard School’ についての O. E. D. の説明である。「スコットランドの地方小都市における庶民の生活を、多くの方言を用いて描くことを主とした小説」といえよう。(Kailyard とはスコットランドにおける家庭菜園であり、kail=kale は狭義には葉の巻かないキャベツの一種、広義には野菜類一般を指す。したがって ‘Kailyard School’ とは「菜園派」ということになる。

1860年に Scotland の Forfarshire の片田舎 Kirriemuir に貧しい職工の第九子、三男として生を享けた J. M. Barrie (以下バリとする) が Edinburgh 大学で M. A. をとって卒業したのは1882年であった。その後、生活に迫られて一時期 *The Nottingham Journal* の論説記者をしていたが、この仕事というのは12ポンドの月収で毎日の論説と週二回の特別読物、その他、という多忙なものであり、この苛酷ともいえる乱作の執筆訓練が、彼の天成の文才に磨きをかけ、後年の大をなす基礎を形成している。この仕事の合間をぬって作家として身を立てようという野心からロンドンの新聞、雑誌に投稿していたが、その反応が現われて、時折採用されるようになり、念願のロンドン進出となったのであるが、*St. James's Gazette* に載った最初の article は *An Auld Licht Community* というスケッチ風のものであった。これはバリがふと気付いて試みに書いてみた故郷 Kirriemuir の町と、その住民、特にスコットランドの片田舎に依然として続いていた偏狭な宗派の一つである Auld Licht Kirk に属する貧しい人々の生態を如実に描いたものであった。以後、同種のものを盛んに書き続け、一冊の単行本として刊行されたのが、1888年に出された *Auld Licht Idylls* である。欺うしてバリの Kailyard 物は *A Window in Thrums* など次々と生まれ、成功を収めたのであったが、この頃までは、まだほとんど劇作には手を染めていなかったのである。この種の作品として英米両国で大評判をとったバリの三巻物 *The Little Minister* は1891年に出たが、劇場主の依頼で play に脚色され、1897年の初演 (The Empire, New York 及び The Haymarket, London) を皮切りにロング・ランを続けた。これは従来のスコットランド物にみられる quaintness に加うるに娯楽的要素も多分にみられるせいであろう。ちなみに、この小説の *The Little Minister*、及びその前後に書かれた数々のバリの Kailyard 物の人気があまりにも高く、垂流が横行しすぎる為、止むを得ず play 以前に小説だけで全集 (Scribners 社及び Hodder & Stoughton 社) を出さざるを得なかったほどであった。「praywright バリ」としてのみ知っている者には奇異な感を抱かせるであろう事実である。

play に至る迄のバリの足どりは以上の様なものであるが、バリの最初の play は *Richard Savage* 及び *Ibsen's Ghost* であり、共に1891年、即ち、小説 *The Little Minister*

の出た年であった。その後も次々と作品を発表し、興業的にも成功を収め得たものも数々あったにもかかわらず、高踏的な critics を悦帽させるほどの目ざましいものはなかったのである。それが1902年に至って、この同じ年に、二本の素晴らしいヒットとなって世に出たのである。*Quality Street* と *The Admirable Crichton* かそれである。前者のあらすじは次の通りである。

ナポレオン戦争当時のイギリスの片田舎、体面を重んずる屋敷町通に、Susan と Phoebe の姉妹が暮している。姉は空しく過した自分の青春を顧みて、妹にだけは何とか楽しい春を、と願い、町内の若い医者 Valentine が妹に求婚してくれるのを心待ちにしている。ところがこの医者は戦争に征って、それから十年近い歳月が流れる。今や生活の為、姉妹は塾を開いて、子供相手に多忙な毎日を送っており、この悪戦苦闘の日日の繰返しの日、立派な士官となってやって来たのがあの Valentine である。一計を案じた妹は、晴着を着飾り、姪だと称して彼を悩殺しようとする。欺うしたある夜、町の戦勝記念の Ball で彼と踊っていた妹は、実は彼の求めているのが、おてんば娘の姪に化けた自分ではなくて、苦の貞淑な自分だと告白されて、まことに嬉しい当惑を感じる。一人二役の芝居を何とかして終らせなければならなくなり、苦しんでいる妹の様子でやがてすべての事実を知った彼は、何も言わずに、上手な計らいで、その姪を田舎へ送り返したという体裁にして、やっと姉妹がもてあましていた影の人物をうまく追い出して、目出度い段取りになるのである。

この結末の見事さ、最後に Valentine が在りもしない影の人物にコートを着せ、ショールをかけて部屋から連れ出すところなど、バリならではの幻想的場面である。姪が Valentine を完全にとりこにした、と観客が思った瞬間に——観客に思わせた瞬間に——主人公 Valentine をして告白させる、という手法は、「言葉の魔術師」というバリに奉られた名称をこえて、一点の破綻も見せない plot の構成上の技巧力が、他の critics の口を封じさせたのであった。そもそもバリの大きな道具立ての一つとして supernatural machinery を用いることはよく知られており、*Mary Rose* や *Farewell Miss Julie Logan* の結末等、*Peter Pan* を引き合いに出さずとも、その材料には事欠かないが、それらにみられる現実と非現実の巧みな交錯の場面を思いおこせば、この play の締めくくりにバリが用いた手法など、もっとも過ぎるほどもっともなものであるといえよう。そしてこの play を流れるものは、何よりも主人公への無限のいたわり、優しさであるが、Ibsen 系統の社会劇全盛時代に、これだけの評価を得たのは、やはり誰の口にも合う珍味のようなテーマの普応性であるかも知れない。*Quality Street* は1902年9月アメリカで、次いでイギリスのロンドンで演じられるようになり、459回というロング・ランのレコードをつくったのであった。

さて、この同じ1902年11月に、*Quality Street* にやや遅れて登場したのか *Admirable Crichton* である。これは英国の貴族とその使用人との関係を材料にして、社会における階級問題は何であるかを問うた作品である。坪内士行氏はこれともう一つの調刺劇 *The Twelve-Pound Look, The Will*, そして *Rosalind* を一冊にして「社会と階級」と題してまとめている。この中の *The Twelve-Pound Look* を *Admirable Crichton* に先立って取り上げてみたい。

この Ibsen の「人形の家」を思わせる *The Twelve-Pound Look* (一幕物) は他の一

幕物)と一緒に *Half Hours* と題して1914年に出版されたが、初演は1910年である。大体バリの play にはトガキが多く、これが大きな特徴となっているが、この play も例外ではない。福田恒存氏によれば、正確なトガキがつけられるというのは目的に向って最短距離を歩んでいる事なのだという。最短距離であれば、歩いたあとで迂廻だったと思われる箇所は一つもない事になる、とも言う。それでこのトガキをセリフと共に引用しながら、この play を眺めてみよう。

さて主人公は Harry Sims, 二, 三日中に男爵の位を授かるのでウェストミンスターの邸で妻を相手に授爵式のけいこの最中。そこへタイピスト登場——祝賀の手紙や電報への返事を出すために主人公が電話で呼んだのである。主人公が着がえをしている間、妻が相手をしてタイピストに仕事をさせていると、主人公晴々と登場。代って妻退場。何と！このタイピストは主人公の前婦人だった。かつての夫婦の対面。かつての夫は自分をすてた、かつての妻をなじる。お前の為には金に糸目をつけなかったではないか。私より出世した者が他にあるか、と。ここで二人のやりとり。

Kate: "Oh, Harry, you and your subline religion."

(ああ、あなた、又あなたの尊い御信仰ですか)

Sir Harry: [honest heart] "My religion? I never was one to talk about religion, but"—

〔真正直な人〕(私の信仰? 私は宗教を語る男ではないが——)

Kate: "Pooh, Harry, you don't even know what your religion was and is and will be till the day of your expensive funeral." [And here is the lesson that life has taught her.]

"One's religion is whatever he is most interested in, and yours is Success."

(あなたは宗教とは何だったか御存知だったことはかつてなし、今も御存知なく、立派なお葬式を出す時迄もお知りになる時はないでしょう。〔ここに人生が彼女に教えた教訓がある〕宗教とは、その人が一番興味を感じていることを言うのです。それであなたの宗教は成功なのです。)

ここでバリが前妻 Kate をして語らせているのは彼の哲学、人生観である。成功 続きの人生というのは、息がつまって人生ではない。死ぬ程望んでいるのは、うまく行かない人達の間交っていたい、という事なのに、人は失敗すると、すぐ、眼界から消えて了うのが常だ。と言う。ここで又二人のやりとり。

Sir Harry: [clenching it.] "I tell you I am worth a quarter of a Million."

〔しっかりと言い放つ〕(私は何十万の金代だ)

Kate: [unabashed] "That is what you are worth to me: exactly twelve pounds. For I made up my mind that I could launch myself on the world alone if I first proved my mettle by earning twelve pounds; and as soon as I had earned it, I left you."

〔すこしもおどろかず〕(あなた御自身にとってはそれだけの値でしょう。でも私にとってのあなたの値を申し上げますと、丁度12ポンドなのです。ですから一週間に12ポンド取れるようになったら一人で世界へ飛出そうと決心して、そうなったとたんに、おいとましましたのです。)

要するに12ポンド儲けるまでは夫にしがみついていた、というわけである。立派な者の事を男子という。だから女は皆、自分の夫を立派な者だと思い、欠点は何とか理窟をつけて、他の何かの裏返しだと思い込みたがるものなのである。ところがあまりにも強い成功という特質がすべてを呑み込んで了って浄化作用をさせなかった、という次第である。しかし、自分は妻を幸せにしている、これ程人生を楽しんでいる者はいない、という主人公に対して、かつての妻は忠告する、

Kate: [slowly] "If I was a husband——it is my advice to all of them——I would often watch my wife quietly to see whether the twelve-pound look was not coming into

her eyes.”

〔おもむろに〕（これが私の忠告ですが——私が夫なら、自分の妻を時々じっとみて、その目の中に12ポンドの仕事探しの目付きが現れていないかどうか注意しますよ。）

欺うして、かつての妻はかつての夫に忠告をのこして去って行くが、現在の妻は夫に向けて、タイプライターの機材はよっぽどするものなのか、と無心にきくのである。観客はこの play のオチを「12ポンドの目付き」というタイトルに見出して、その発想の素晴らしさを知らされるが、結末は観客がつけるものであり、この play の余韻も観客各自の胸に伝えられれば、それで良いのである。

さて *Admirable Crichton* である。一説に依れば play というものは当たっていれば、わざわざ偉そうな本に仕立てて出版する事はない、そうで、これを裏返すと、舞台であまり成功しないものは、いかにも文学者らしい体裁で売出されて田舎おどし向きに出来ていたりする、などといわれる。それは兎に角、大当たりして、又広く読者を集めたというのがバリのこの作品であろう。1900年頃の想定という事になっていて、四幕物である。第一と第四幕がロンドンのローム伯爵邸で、第二と第三幕が太平洋上の一孤島となっている。この作品は80年も前に書かれたにも拘らず今日でも依然として新鮮でみずみずしい。当時作者が意図した効果のいささかも減ずる事なく、興味深く読む事が出来る。それはこの play が、われわれが皆、よく知っているのに、言い表わすことの出来ない永遠に通ずるものを取扱っているから、ともいえるが、それをやってみせてくれたのは、やはり発想の名手バリであった。そこで、この作品を支えているものは何であるか、を順に追って眺めてみたい。

第一幕

男やもめの The Earl of Loam (ローム伯) は、すこぶる民主主義的な頭脳の持主で、毎月一回、邸内の召使全員を客に招待して、三人の娘にお茶のサービスなどさせては悦に入っているが、閉口しているのは本人以外の全ての登場人物である。今日もお祭さわぎの特別の日で、召使達は一人ひとりうやうやしくアナウンスされて客間に通そされている。そして主人公の召使頭 Crichton (クライトン) に向い、長女が、さぞ嫌だろうと同情すると、彼はこんな事をされると召使部屋の作法が乱れて困るのだ (It disturbs the etiquette of the servants' hall.) と言う。さらに召使部屋では平等は許されないのだ、と答える。これを聞きとがめた伯が、階級制度は人間が作ったものなのだから、自然に帰れば皆平等であり、そうなるのが自分の理想なのだという、それに対してクライトンは次の様に言う。

“The division into classes, my lord, are not artificial. They are the natural outcome of a civilised society. There must always be a master and servants in all civilised communities, for it is natural, and whatever is natural is right.”

(階級制度は人間がつくったものではなく、文明社会での自然の成り行きでございます。文明社会には必ず使うものと使われる者がおり、それが自然で、自然はいつも正しいのです。)

そしてこの「自然」というものに後で彼等は、いやという程、思い知らされる事になるのである。伯は今日の邸のにぎやかな需囲気に満足し乍ら、いつもの月例演説を始める。そして今回は特に重大な発表をする。それは、もう二日もしたら伯は三人の娘と、甥と、牧

師と、召使いと（それに結局召使頭のクライTONを同行するハメになって了ったが）数ヶ月にわたるヨットの船旅をする、というものである。ここでバリは長女の間に答えるクライTONの言葉として次のように自らの考えを語らせている。

“I am the son of a butler and a lady's maid——perhaps the happiest of all combinations, and to me the most beautiful thing in the world is a haughty, aristocratic English house, with every one kept in his place. Though I were equal to your ladyship, where would be the pleasure to me? It would be counterbalanced by the pain of feeling that Thomas and John were equal to me.”

（私は召使頭と小間使の間に生まれました。——おそらくこれ以上の取り合わせはないでしょう。私がこの世で一番あこがれているのは英国貴族の威厳ある家風なのです。その中では各自が自分に応じてその立場を守っております。たとえ私がお嬢様と平等になったとしても、それが何になるでしょう。そんな喜びは、トマスやジョンも私と平等になると考える苦しみと差引されて何にもなりません。）

ここに equality に対するバリの考え方がはっきり打ち出されており、これこそバリがわれわれに突きつけている大命題なのである。要するに「平等」というと、人は皆「自分は誰とでも（という場合、上の者しか対照にしていない）平等なのだ、と考える。ついぞ下の者との平等などは頭の中にないのである。しかしクライTONは、それが頭にあるので、召使頭という——只の召使ではない——地位に甘んじている、というわけである。したがって伯の考え方にはついていけない。

第二幕

場面はガラリと変って絶海の一孤島になっている。一行が遠洋航海に乗り出したヨットが暴風雨で難破して、皆この島に漂着したのである。——只、伯だけは難破当時は行方不明になっていたのが、あとから藪をかき分けて這い出して来て、一同と再会したのであるが、ここに至ってクライTONの信ずる「自然」の状態が現出され、それぞれの言動にあらわれるようになる。日く、ロンドンに居るつもりで、何の足しにもならない警句など吐かない事、日く、働かざるものは食うべからず、という工合に、クライTONが初めて自分の意志を主張し出したのである。これに抵抗して長女が言う。くには立派な召使だったので、今は平等論を振廻すようになったのか、と。これに対するクライTONの答は次の通りである。

“I disbelieved in equality at home because it was against nature, and for that same reason as I utterly disbelieve in it on an island.”

（くには私は平等論に反対いたしました。自然に反するからです。そして同じ理由で、この島でも私は平等論に反対いたします。）

何しろこの島に漂着してからというもの、木を倒して小屋をつくることなど、すべてクライTON一人の力に頼っている有様なのであるから。彼のおかげで孤島での生活に電燈までもとせらるようになれば、事情は一変して、やがてクライTONが一家の家長、島の酋長なのである。この成り行きをおそれた長女は父親が依然として自然の決めた主人なのだろうと念を押すが、クライTONは、おそらくそうなのでしょう、と言葉を濁すのである。彼に言わせれば、伯は島でみつけたヘアピン一本を拾わずに來た事が決め手になって了った、というのである。この場合ヘアピンは針をつくってズボンを縫うのに島ではなくてはならないものだったのである。やがてクライTONに反抗した一同が何も持たずに（というのは、島

にあるものは全てクライトンの作った物ばかりだったから) 彼一人を残して何処かへ行つて了うのである。

第三幕

第二幕から二年ほど経っている。ここに至って観客が見せられるのは、全く階級の転倒し去った島のいわゆる「幸福の家」の図である。かつてのクライトンの予言通り、境過が全てを一変させて了っている。勿論主人公はクライトンで ‘master’ と呼ばれ、三人の娘達は彼の食卓に待るのを無上の光栄と心得ており、その折には召使が只一枚持っているつぎはぎのスカートを借してくれ、などを頼んだりするのである。伯は今や ‘Daddy’ の名で呼ばれる身となって、主従は立場をかえて了っている。長女は勇ましい姿で矢を使って鳥を打ちに出かける毎日であるが、ここでバリの面目躍如たる表現を探してみよう。彼女がクライトンの忠告に従わず、危険な場所へ行くのを禁止されて彼に反抗した時の事である。ふくれ面の彼女に向ってクライトンの吐くセリフ(彼は今や ‘master’ と呼ばれる身分であるにもかかわらず——)は斯うである。

“You must do as I tell you, you know. …… [smiling at her fury] We shall see. Frown at me, Polly; there you do it at once. Clench your little fists, stamp your feet, bite your ribbons. ——”

命令通りにするんだよ。[ふくれる彼女に笑いかけて] やってみようポリー。私をにらんでごらん、そらすぐやるじゃないか。げんこを握ってみなさい。足を踏みならして、齒をくいしばって——)

ここでクライトンが長女にやらせた事は——よくよく彼女の事を知っているので、こんな場合に彼女のやりそうな事は先刻承知しているので、命令という形でやらせてやった、というわけである。バリの発想、バリの手法そのものではないか。さて、自然の成り行きの状態にも全員慣れてきて、静かに過去をふり返る余裕など出て来て、あれこれと、昔の話(ロンドンのローム邸での)など語り合ったりして時を過している。そしてこの時、当然の帰結のように、自然発生的にクライトンの頭に浮んだ想いは、こうであった。

“——A King! Polly, some people hold that the soul but leaves one human tenement for another, and so lives on through all the ages. I have occasionally thought of late that, in some past existence, I may have been a king. It has all come to me so naturally, not as if I had had to work it out, but——as——if——I——remembered.”

(国王か! ポリー、一説によれば人間の魂は一つの肉体から別の肉体へ移り住むに過ぎない、それが永遠に繰返される、というのだ。近頃、私はよくこんな事を考えている。いつか遠い遠い昔に、私は国王であったかも知れない、私の心にはそれが何の無理もなく、とても自然に浮んでくるのだ、まるで——昔の——思い出を——たぐるように。)

やがてクライトンは、かつてのお嬢様である長女を妻にしてやろうと言い出し、‘Daddy’ と呼ばれる父親の伯も大いによろこび、それでは花嫁のスカートを出来次第、結婚式を——という事になる。と、ある日のこと、突如としてこの「幸福の家」をおそった一発の砲声、救いの船が来たのである。水を求めて寄った英国籍の船であった。卑怯をきらうクライトン酋長は、黙って行かして了わうという長女に反対して、合図の「のろし」をあげさせて、彼等の存在を船に告げ知らせたのである。すると、どうであろう! 船員達を案内して出へ入って来た ‘Daddy’ の態度は、いつの間にか貴族ロームのそれに一変しており、彼等を迎えた酋長クライトンの態度も又、いつの間にか召使頭クライトンのものに変

って了っている。そして彼にすがりつこうとする長女を寄せつけず、昔の召使頭の口調でたった一言 “May lady” (お嬢様) と言い、これで遂に再び天地は引っくり返って、もとの世界へと逆戻りして了ったのである。

第 四 幕

再びロンドンのローム伯邸に帰った一同は、まだ島の生活の悪夢からさめ切らずに、クライトンを、腫れ物扱いにして、いろいろなこっけいを演じている。島に於ける彼等の生活の真相を何とかクライトンの口から聞き出そうとする長女の婚約者の母親に対して、クライトンは沈黙を守り、それによって、この一家の危機を救うことになるのである。そして自分もこの邸から暇をとって、過去の亡霊をこの家から一掃してやろうと決心するに至る。

さて、この play から急いで結論を出す事はどうであろう。バリの目的は、貴族側の人間をどう描くか、にあるのではなくて、タイトルのように、‘Admirable’ なクライトンという人物をいかに作り上げるかにあるのである。そして出来上った主人公は身分は召使であるが血統は貴族であり、王者に生まれついている。そしてこの主人公は第一幕においては、馬鹿に物わりの良い主人の平等論にへきえきし、第二幕においては、無人島に漂着してみたら、自分の中から自然にあふれ出てくる生れ乍らの王者の資質と実力とに困惑する。そして第三幕では自然の法則に促されるように王者の生活をつづけたのだが、第四幕においては、その同じ自然の法則によって以前の召使に戻ったのだ、とみるべきだろうか。いや、彼は自分の自由意志で元に戻ったのである、のろしをあげて船に知らせ、無人島の生活にピリオドを打ったのは、ほかならぬ彼自身だったからである。これを真の王者という。最後の幕切れでは、ひとつの階級が他の階級を裁いているのではなく、主人公に与えられた澄み切った無意識さ、とでもいうようなものが、階級そのものを裁いている、といえるのである。そしてバリは play を面白くする、という劇作の必然性にそって、これをリアルに表現したのであった。ところで、この主人公にはモデルか（といっても名前について）いるのである。

16世紀の Scottish scholar で12ヶ国語に通じていたといわれる James Crichton に与えられた名称か、実は ‘Admirable Crichton’ だったのである。それを借りてタイトルにしたバリの考えは、と言えば、多分、この名前によって perfect man というものを表わそうとしたのであろう。この作品は irony と romance を巧みに交錯させたバリの genius を最もよく表わしたものの一つであるが、その romance は主として setting にあり、irony と satire とは、登場人物の取扱いと全体の plot にある。バリに problem play を求めれば、これは、まさにその一つであり、又、バリの play に philosophy を求めれば、これも又、たしかにこの中にある。そして problem は未解決のままに残されるが、彼の philosophy はクライトンの口を借りて語られている “Circumstances might alter the case.” であり “Whatever is natural is right.” という事になるであろう。

参 考 文 献

- Half Hours • Der Tag* : J. M. Barrie
The Admirable Crichton : J. M. Barrie
社会と階級 : 坪内士行
The Quality Street : J. M. Barrie
The Little Minister : J. M. Barrie
J. M. Barrie : 阿部孝
J. M. Barrie and theatre : H. M. Walbrook
Barrie and The Kailyard School : George Blake

たなべ やしま (英文学)